

倉橋由美子文学における女性像および女性論についての研究

劉, 苗苗

<https://doi.org/10.15017/1785343>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏名	劉 苗苗			
論文名	倉橋由美子文学における女性像および女性論についての研究			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	西野 常夫
	副査	九州大学	教授	阿尾 安泰
	副査	九州大学	准教授	波瀾 剛
	副査	佐賀大学	教授	相野 毅
	副査	久留米大学	教授	狩野 啓子

論文審査の結果の要旨

本論文は、倉橋由美子の文学作品における女性像および女性論について考察することを目的としている。とくに、倉橋の小説の女性登場人物のイメージや倉橋のエッセイに見られる女性論の形成に影響を与えたものとしては、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの著作を主に取り上げ、両者の影響関係を論じている。

第一章では、倉橋の女性像の特質の究明の出発点として、小説「夏の終わり」、「蠍たち」、「パッション」、「醜魔たち」、「悪い夏」、「暗い旅」、「犬と少年」などに見られる、人物たちの性的放縦の場面の表現に着目し、それらが、倉橋が親しんだと考えられるギリシア・ローマ神話に見られるおらかな描写やアルペール・カミュの小説「異邦人」に見られる浜辺の場面の表現と関係があることを論じている。

第二章では、小説「蛇」、「貝のなか」、「密告」、「死んだ眼」、「聖少女」、「迷宮」、「婚約」などを素材として取り上げ、同性愛、近親相姦、サディズム・マゾヒズム的な性行為などに耽る人物の言動、あるいは男性の妊娠、性的快楽に無縁な女性の描写などを分析することによって、倉橋が自由で新しい性についての考え方を模索・提示しようとしていると論じている。

第三章では、倉橋の小説に、時代の流行の先駆者として、同時に複数の人間と恋愛をすることを標榜する人物たちが登場する一方で、結婚反対論者が登場したり、あるいは、恋愛結婚にあきたらず、旧来の見合い結婚に逆行する女性が登場したりする、というふうに、倉橋の女性観に多様性あるいは動揺が見られる側面があることを論じている。

第四章では、倉橋の女性論の形成に対するボーヴォワールの著作の影響について論じている。ボーヴォワールの影響が明瞭にうかがえるのは、倉橋の女性論がエッセイの形で表明された「第三の性」に対する「第二の性」の影響であるが、小説としては、ミシェル・ビュトールの二人称小説『心変わり』と同様、特殊な人称形式で語られる「暗い旅」における二人の主人公〈あなたがた〉の関係の背後に、ボーヴォワール「娘時代」や「女ざかり」に見られるボーヴォワールとサルトルの関係が揺曳していることを論じている。

第五章では、「どこにもない場所」、「蠍たち」、「婚約」、あるいは晩年の「アマノン国往還記」などに見られる母親殺し、あるいは、わが子を食らう母、といった母親にかかわる特殊な描写を分析し、こうしたグロテスクな表現は、ユングのいわゆる母親の元型「グレートマザー」の両面的性質の一方の性質である、子供を束縛し、飲み込んでしまうというような否定的性質、あるいはフロイトの「同一視」といった考え方から示唆を得たものではないかと論じている。

結論の章では、これまでの各章の考察をまとめた上で、倉橋の小説に見られる、日本の近代文学

でユニークな位置を占める、やや過激とも言える女性描写・女性像は、男性の下で抑圧された女性が自由を求めて、もがきつつ、新しい存在に生まれ変わろうとするプロセスを虚構の形式で表現したものであると述べ、そうした倉橋の表現に大きな影響を与えたのは、同時代に世界的な流行を見たボーヴォワールの著作であると強調している。

本論文の功績として挙げられる第一の点は、倉橋の初期から晩年にいたるまでの小説群に登場する様々な女性人物を取り巻く環境や背景の描写を分析し、そうした描写を行なう上で影響を及ぼしたと考えられる他の作家の文学作品を指摘し、両者のつながりについて、一定の説得力のある議論を展開していることである。第二の功績は、女性登場人物の造形のしかたや人物の言動を支える根拠となった言説と考えられるものを、芸術作品以外の著作、すなわち精神分析学の領域の成果およびボーヴォワールの著作の内容に結びつけ、その関係性について、やはり説得力のある議論を展開している点である。本論文が行なっている、倉橋の手法の内実についてのこうした複眼的な考察は、倉橋の文学の特色を把握する上で従来の研究には見られない幅広い知見と有益な見取り図を提供している。

審査においては、倉橋が読んだと思われるフランス語文献の範囲をもう少し広げる必要があったのではないかとの指摘や、精神分析学とボーヴォワールという二つの異なる領域からの影響についての考察においてももう少し整合性を持たせる必要はなかったのか、との疑問が提出されたが、これらの疑義も論文全体の議論の有効性を損なうものではないと判断された。

よって、論文調査委員会は、本論文を博士（比較社会文化）の学位を授与するに値すると判断した。